

# 大学への転職と初めての単身赴任生活

特別会員 松田 一俊



2011年(平成23年)3月31日

「まずいーこのままでは乗り遅れてしまうぞ。」この日まで私は横浜

にある株式会社IHIの基盤技術研究所に勤務していました。会社生活最後の日、定時後に新横浜から博多行き最終の新幹線に乗るつもりでしたが、残務・引継ぎが終わらず、思わず冒頭の言葉が頭を過りました。結局最終の博多行きには間に合わず、何とか後発の新大阪行きに乗車することができました。こんなことになった遠因は、その約3週間前に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)です。その日は新大阪駅前のビジネスホテルに1泊し、翌朝

6時発のみずほ号に乗って、大学に滑り込むという有様でした。会社勤務から大学勤務への生活パターンの劇的なシフトを体験する羽目に陥ってしまいました。昔NHKで放送されていた「タイムトンネル」を思い出しました(50年以上前の番組だから分かる人は少数かも)。

## 会社生活と大学生生活の違い

自分が感じた両者の一番の違いは、大学には「上司」がないということとです。例えば、会社の場合、来年ある国際会議で今年度の研究成果を発表したい場合、通常論文発表および海外出張の許可を上司から得る必要があります。一方、大学研究室は「個人商店」なのでほぼ自己裁量に任されています。これはほんの一例ですが、大学の方が精神面での負担は軽かったように思います。しかし、すべて個人に任されているのである意味においては精神的には厳しかった面があったのは正直なところでは

また、次年度の研究テーマを決める際も会社であれば研究所幹部による審査をパスする必要がありますが、大学はこれも自己裁量です。一方、飲み会の頻度は、圧倒的に会社生活の方が多かったです。とくに研究所の副所長だった時期は、夕方に研究員らとグループごとに討論会を開催し、定時後はそのまま会社近くで懇親会をするというパターンの繰り返しで、何度も体調を壊しました。その点大学では健康的な生活を送れたので、体重も下がりました。

## 単身赴任生活

生活費節約に大いに寄与したのは、赴任当初から退職まで官舎に入居できたことです。独り身にとっては広すぎる間取りでした。ゆつたりと空間を活用できるメリットはある一方、掃除が大変で一通り終えるのに約2時間を費やしました。初めの約4年間は北側の第一アパート3階で、後の約8年間は南側の第二アパート4階でした。いずれも日当たりは最高で、思う存分布団を干すことができ、大満足でした。さらに2号棟4階はすぐ南側に建物がなく、最も東側(明治学園グラウンド側)だったので、眺

めもよく小倉方面の市街地から皿倉山まで眺望も良かったです。夜べランダからの景色を眺めながら飲む缶ビールは最高でした。困ったことは食事です。親元を初めて離れた大学生活でも外食をしていましたが、単身赴任生活6年目にそれまで夕食に利用していた定食屋さんがお店を閉めたことを契機に、初めて自炊を始めました。左の写真はその一例です。なお、第二アパートは今年3月末で廃止され、自分は最後の住人の一人となりましたが、個人的には退職と同時期だったので非常にラッキーでした。



初めて自炊を始めた頃の夕食の一例

## 研究のこと

今度はガラッと変わって研究のことについて少し触れたいと思います。会社における主な研究内容は、長大橋梁等の大型鉄鋼構造物の耐風安定性の研究でした。明石海峡大橋、白

鳥大橋（室蘭市）、ビン橋（ベトナム）、ストーンカッター橋（香港）

等の耐風検討をやってきました。大学に着任する頃にはすでに日本における長大橋建設ブームは去っていたので、建設コンサルタントとの共同研究では中規模橋梁が研究対象となりました。また中規模橋梁の耐風安定性の応用的研究だけでなく、自己励起型渦励振の基礎的研究にも注力しました。結果的に大学における研究生生活はこの自己励起型渦励振の研究が中心となりました。幸いなことに研究を担当した歴代の学生は熱心に取り組んでくれました。本当に感謝する次第です。研究初期に担当し数多くの辺長比の異なる矩形断面を強制加振させたときの流れの可視化実験のデータ整理に骨を折ってくれた学部生、博士後期課程の研究において自主的に実験ケースの追加検討に取り組み、彼なりの振動現象メカ

ニズムの仮説を立てた中国からの留学生など優秀な学生たちに恵まれました。その留学生は学位を取得した後、現在は中国の大学で耐風工学の教員として活躍しています。

## 出前講義

出前講義の学内募集には、ほぼ毎年手を挙げました。高校生に講義をするのは、大学生とはまた少し異なる趣がありました。講義内容である技術的なことだけでなく、大学ではどんなことを学ぶのか等興味津々な眼差しが印象的でした。ちなみに講義テーマは、「長〜い橋が風で揺れる!?」揺れを小さくする技術とは？——でした。個人的にはまだ訪れたことのない町に足を踏み入れるというワクワク感がたまりませんでした。定年退職する3月の中旬に長崎県の高校を訪れました。その結果、最後の最後で出前講義で九州全県を踏破することができました。もちろん九州だけでなく愛媛県、山口県や岡山県等にも行きました。

今後日本の社会を背負っていく高校生の眼差しが忘れられません。しかし残念ながら積極的に質問するよ

うな熱意のある高校生が年々少なくなってきたように感じました。

## コロナ禍

大学において最も苦労したことの一つは、コロナ禍に伴う研究活動の制約、オンライン講義への対応でした。研究では実験時間が例年の半分以下であったにもかかわらず、当時の学生はその分効率的に実験を行いました。講義の面では、最初のオンライン講義で学生がZoom画面に現れたときは、本当にほっとしました。

学生の顔が見えないので、理解しているのかそうでないのか、こっちは全く分かりません。講義を進める上で、この点が苦労しました。また、学外委員会もすべてオンライン会議になり、東京までの往復の時間を有効に使えるようになったことはメリットでしたが、やはり画面越しのやり取りなので、対面であれば発言の真意を表情から読み取れるようなこともオンラインではイマイチでした。さらに対面であれば会議後、近くの居酒屋で飲み会があり、会議での発言の真意を聞いたり本音で話合ったりと大いに盛り上がりでしたが、オンラインでは叶わないことになってしまいました。

## ありがとうございました

新横浜から新幹線という「タイムトンネル」に乗って北九州にやってきた右も左も分からないアホな自分に対して、親切にご対応いただいた九州工業大学の皆様、とくに建設社会工学研究系の関係各位には感謝申し上げます。誠にありがとうございます。おかげさまで充実した12年間の大学教員生活を送ることができました。

この執筆の依頼メールを重枝先生からいただいた時期は、退職後の次の就職に向けた勉強の時期と重なっていました。しかし、原稿提出の締切に余裕があったこと、また重枝先生には在職中からいろいろとお世話になったこともあり、お引き受けすることになりました。退職後約3カ月の間の事前研修および法定研修を踏まえて、無事試験にパスしました。10月から特許の先行技術文献調査の仕事に就くことになりました。企業および大学における研究開発等の経験を活かして今後の社会人生活を頑張っていく所存です。

（工学研究院建設社会工学研究系

元教授）